

「～流れるままに～」

日揮株式会社 堀川 愛子

エンジニアリング会社に就職して、早7年目。本化学工学会の男女共同参画委員になったことがきっかけでこの原稿の依頼をお引き受けしましたが、なかなか筆が進まず時間ばかり経ってしまいました。その理由は、委員である上に50人目で本企画をクローズするという節目にあたり、何か女性が働くことに対しての「提言」的なカッコいいことを書かなくてはという変な見栄が働いたものの、振り返ってみると「女性だから」ということを意識して働いたことがなく、流れるままに生きてきたことであつたのではないかと思います。委員の方々に相談したところ、「その女性を意識したことがない」っていうのが話題になるのよ！うらやましい！という心強い助言をいただきました。なるほどこれでも話題になるのかというわけで、当初描いていたカッコいい提言は何もできないのですが、一女性エンジニアがどのようにここまで流れてきたかを、気軽に読んでいただければと思います。

エンジニアリング業界に足を踏み入れたきっかけは、大学時代の研究。中心部がステンレス製の円筒で、流量計・周辺機器などを組み立てると背の丈以上ある計測装置を、かなりのお金と期間をかけて設計・調達・組立て、すなわちプッチエンジニアリングを遂行する機会を運よくいただいていたのですが、出来上がって3歩下がって見上げたとき率直に「おー、きれいだなー」と感嘆の声がもれ、万感の思いでした。ところが隣にいた後輩が「えー、そうですか??」と言ったのです！装置に絶対の自信があつた私は、「そうか、この感動は本当に苦労して完成させた本人にしかわからないのだな」と前向きに捉え、「あの巨大なプラントを大勢の力で完成させたときは、どんなに感動するんだろう…」とエンジ会社への就職を志望。期待に心躍らせました。

入社後は希望通りエネルギープラントのプロセス設計に配属。女性エンジニアは同期の中で1割、会社全体の割合としては極少数でした。女性の少ない環境に多少の不安はありましたが、5年上に憧れるべきカッコいい女性の先輩方がおり、彼女たちがどうやって女性の働く道を切り開いて行くかが、一つお手本になるかなと考えていました。(皆様今でもバリバリ働いています！)女性だからといって仕事の上で特別視されることはなく、男性と同等の仕事内容、時間をこなしていきました。

入社3年目の夏から約1年間、バハレーンの製油所建設現場に駐在しました。時代は徐々に変わってきており、10年上の女性先輩の駐在は国内現場、5年上は東南アジア限定であつたのに、近年では中東の現場でも働けるのです。実際に私の同期女性は、6名全員中東駐在を経験しました。ここでももちろん働き方は対等。ヘルメット・作業服・安全帯姿で何十メートルもあるタワーに登ったり、パイプラックの上を歩き回ったりと、汗まみれになって働きました。ただし駐在における生活面・安全面は、男性陣に相当気を遣っていただいたと思います。おかげさまで憧れのプラントを完成まで見届け、貴重な1年間を無事に終えることができ、大変感謝している次第です。

帰国してからは、再び設計・研究開発・技術調査・ライセンス契約など多岐の業務を並行していますが、一貫してCO₂を含む酸性ガス処理にかかわっています。皆様はCCS(CO₂ Capture and Storage)という言葉をご存知でしょうか。天然ガス処理プラントや工場、発電所などのCO₂大規模発生源からCO₂を分離・回収し地下に隔離する技術で、CO₂を早期・大規模に削減できる温暖

化対策の切り札として注目されています。これを国内で行うプロジェクトの設計を担当して以来、「CCS」がライフワークになりつつあります。日本では経済産業省の石炭課が先導しており、官民合同 20～30 名程度で海外に視察に行く機会が何度かあったのですが、この機会にオーストラリア、カナダ、EU(ドイツ・オランダ・スペイン)の CCS 現場を視察しました。どの視察でも女性エンジニアは私一人でしたので、やはりよくも悪くも記憶に残りやすいのではと思います。人当たりがいいのは女性の特権で、変に肩肘張るのはかえってマイナスというのが私の考え。(かといってヘラヘラしてはもちろんだメです!) このバランスにはやはり気を遣いますが、わからないことは素直に聞いて、自分の専門分野には誠意を持って応えて行けば、はじめは好奇の目で見ていた年配の男性にも面白いヤツだと認識してもらえそうです。

また海外へ行くと、この分野で働く女性を多く目にします。例えばドイツの発電所で実証試験現場を案内してくれたのも、カナダで国策のプレゼンをしていたのも、アブダビの展示会で自社が展開する CCS プロジェクトの宣伝をしていたのも女性でした。国際的な場で堂々と振舞う姿を見て、こちらも負けてられないと気合が入ります。

よく学生さんに「結婚しても一生働ける職場ですか?」と聞かれます。今は自分ひとりの都合で時間を自由に使っている私も、今後そうもいかない場面を迎えるかもしれません。ただその時は何でも一人で 100%頑張ろうとせず、周りの方の力も借りながら臨機応変に対応すれば、何とかなるだろうと気楽に構えています。ただこう考えられるようになったのもつい最近。少し前までは冒頭にあるように変にカッコつけたり、いつも 120%やらなくてほと休日も頭がいっぱいで心休まる時がなかったり。歳を重ねるうちに少し気を抜けるようになり、色々な意味で自分がマイルドになってきた気がします。

最後になりますが、本委員を引き受けた理由のひとつに、沢山の方と知り合って働く女性のネットワークを広げたいという思いがありました。幸いにも本企画も No.50 を迎え、次の展開として執筆くださった方との交流の場を持つ企画を行う運びとなりました。好評であれば、これを読んでくださった皆様ともお会いできる企画に発展するかもしれません。その時はぜひぜひ、色々なお話をしましょう!!

【執筆者の紹介】



24 時間リレーマラソン会場にて、会社の同僚と(前列左が筆者)

堀川 愛子(ほりかわ あいこ) 氏

<最終学歴>

東京農工大学大学院
生物システム応用科学研究科 修了
生物システム応用科学専攻 (化学工学)

<現 職>

日揮株式会社
技術開発本部 技術推進部